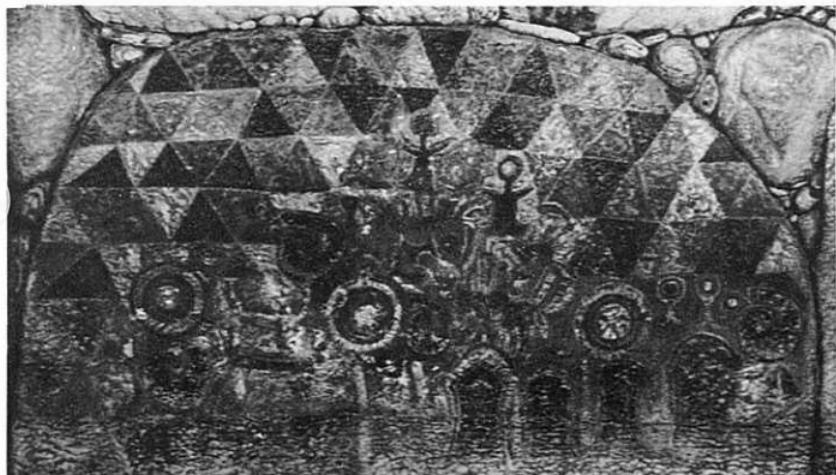


No. 1

博物館報

50.6.25



(史跡田代太田古墳の壁画)

写真説明……六世紀の古墳文化に異彩を放つているものに、壁画系の装飾古墳がある。この壁画系の装飾古墳の流行には、高度の彩色技法の発達が考えられるのであるが、その背後には五・六世紀を通じて豪華・帶方遺民と称する新技術を身につけた漢人系の人びとの渡来があったことを見のがすことができない。壁画系の装飾古墳は、福岡・佐賀・熊本・大分の4県に分布しているが、その中心は筑後川と菊池川の流域にあると考えられる。

田代太田古墳は、鳥栖市田代本町にあって、低い台地上に築かれた封土の径54メートル余りの大円墳であって、内部主体は3室からなる横穴式石室である。奥壁と抽石および側壁の一部との3か所に、赤・黄・緑の3色を用いて幾何学的文様と、人物・舟・騎馬人物・日月・櫛などの図像とが描かれているが、石肌の色を利用して4色の効果をあげている。この図は、奥壁の部分で、日下八光氏の復原模写になるものである。

目 次

史跡田代太田古墳の壁画	1
化石展記念講演要旨	2
化石展から	3
坂の下遺跡	4
大願寺廃寺跡遺瓦	5
肥前鐘	6
近代洋画壇に活躍した人々(その1)	7
博物館の歩み、46年度の事業計画	8

化石展記念講演要旨

生物の進化と絶滅

—恐竜を例にとって—

国立科学博物館地学研究部長

尾崎 博

脊椎（セキツイ）動物は、古生代のなかはごろ今から約4億年前に初めて地球上に現われた。セキツイ動物というのは、体の中心に脊骨が通っていて、その脊骨を中心には筋骨があり、手足がそれぞれ2つづつしている。

4億年前に現われたナメクジウオというのは、半透明の動物で、骨ではないか頭から尾の方まで神経のようなものが通り、それを中心にして内がついている。また、口には骨がなく、真中にヒモがある動物で、水中に生息していた。

これが現われてから動物界に大変動がおこった。ヨロイのような骨で身を固めたカツチュウ魚、軟らかい骨のあるサメなどの動物が現われてきたのである。また、大きい魚の仲間もてきて、セキツイ動物が強くなってきた。

古生代の終りごろ、その魚の中に陸にはい上ることでできるものが現われた。これは、骨の先にヒレがついているため、はって陸へいることができたのであるが、アフリカの東海岸でとれたシーラカンスという魚によくにたものである、陸に上っているうちに、空気の呼吸ができるようになり、ヒレが指にかわって歩行することができるようになった。これが両棲類と呼ばれる動物であって、はじめから陸にも水中にもすむことのできる両棲類も現われている。

両棲類が現われたとき、その中から変ったのが一つでてきた。両棲類はみな水中に卵をうみ、陸上にうむことができないが、それは卵が水にあわてしまうからである。もし、卵に殻がついておれば、陸上にも産めるし、呼吸もできる。卵に殻がつき、完全に陸上で呼吸できる動物ができるが、これがハム類であって、両棲類が現われた後に、すぐ現われている。

陸上は、そのころ亜熱帯のように気候が暖かくて、夏と冬の差がなく、いたる所に樹木が「ウツソウ」と茂っていた。南極にも石炭が発見されていて、そこからリストルザウルスと呼ばれる体長1メートル余りの四つあしで歩くハム類が発見されており、北極でも岩場の中から大きな足跡が発見されている。このように、そのころは南極から北極まで動物も植物も生育できるような環境であった。

陸上には、他に強い動物は何もいなかったので、他から襲われる心配はなく、しかも食べ物は実に豊富であった。高さ30メートルもあるシダやトクサ、あるいはヒカゲノカズラなどの大きい樹木が生い茂り、70センチもあるトンボ

や羽の長さが30センチもある大きなゴキブリの仲間、また水中にはヒルやクラゲの仲間なども住んでいた。これらの動物が地球上のいたるところに、数多くすんでいたため、温暖な気候と豊富な食物に恵まれたハム類の仲間は、どんどん大きくなっていくとともに、地球上のいたるところに散らばっていった、恐竜時代を迎えたのである。

しかしながら、7000万年前になると、こういう恐竜の仲間は、地球上から全く姿を消してしまって、地球上の動物界に大きな変化がおこった。私たちは、恐竜の仲間は地球中でおこったものだから天罰を受けて死に絶えてしまったというふうにいっている。しかし、2億3千万年の寿命をもっていたことになり、余り短かいものとはいえないよう思われる。

恐竜の後に地球上に現われたところの鹿・象・クジラなど人類を含めての哺乳類の仲間はどうであろうか。鹿も象もそしてクジラなども人類をのぞいて、今日相当に減少していく、すでに哺乳類は滅びつつあるのではないかといふ感を深くするのである。

人類をのぞいて、陸からも海からも哺乳類は次第に姿を消しているので、このことから考えて哺乳類の世界は、大体7000万年といつてできるようである。この絶滅に陥った哺乳類の世界を長くするためには、どうすればよいかということを一つの課題ではなかろうか。（文責在記録者）



（タイラノザウルス模型）

資料紹介①

特別企画

「化石展」から

—とくに県内産化石について—

開館記念特別展の一環として、化石展を計画したところ、国立科学博物館をはじめ九州大学や山口県立大橋高校、九州、山口各県の博物館および県内化石所有者の、ご理解とご協力によって貴重な化石を多数、出品していただいた。そして西日本地区では珍らしく充実した、化石展が開催できた。

地塊は削成されて以来、数十億年の年月を経ているといわれるが、本県には数億年前という古い化石は知られていない。

脊振山地は深成岩の花崗岩からできている。花崗岩は中生代の白亜紀のものといわれ、古生層を貫入して被覆岩となっているわけだが、その後の浸蝕作用で、現在はその深部だけしか残っていない。脊振山地の南側に、巖木町・多久市・大和町・神崎町・鳥栖市と点在する古生層の変成岩類や、巖木町から産出する石灰岩は化石を産しないので地質年代の測定はむづかしいのである。とくに石灰岩は海成のものと考えられるが、変成作用が進み品質化しているので、化石はみつかっていない。

本県で化石がよく産出している地層は第三紀層に属する地帯である。第三紀層は相知層群が古第三紀の漸新世（3700万年前）、新しい佐世保層群が新第三紀の中新世（2500万年前）だといわれており、その約1,200万年の間に海成、淡水成の地層がそれぞれ堆積し、化石を産しているわけである。

相知層群は巖木層と芳の谷層からなりたっており、石炭を含む地層である。巖木層は海成であるので、二枚貝類が

多く、芳の谷層は陸成だが、海成の時代もあったので、ハス、シユロ、ヤナギ、クス、ブナの植物のほかに、二枚貝も産する。

杵島層群には杵島層、佐里砂岩層、行合野砂岩層、畠津頁岩層、畠津頁岩層などの海成地層があるので、カイ類、ウニ類、海生動物の化石を多産する。有田化石帶、行合野、佐里の化石産地が有名である。海成地層で石炭の産出はみられない。

佐世保層群は伊万里市の周辺、国見連山、高串の周辺から西へ、長崎県へとつながる石炭を含む地層である。淡水成や陸性の相浦層、中里層、袖木層など数層からできていて、カキ、シジミガイ、ニシキガイのほかに、ヤナギ、セコイヤ、カシなどの植物化石も産する。

県内の化石は前記した第三紀層の露頭のほかに、採石場などからの採集や、石炭採掘の副産物として、坑内の産出化石を爱好者や、小、中学校などで、理科教材として保存されている程度である。しかし去年秋閉山した伊万里大川町の大日鉱業、立川鉱業所は、東北大学、古生物学科出身の山下勝章氏を中心に、化石採集熱がさかんで、カメ、サメの背椎、サメの歯、ウニ、クリの実、ヤナギ、ブナの葉など、坑内ばかりではなく、立川鉱業所周辺の採石場などからも採集された貴重な化石がある。

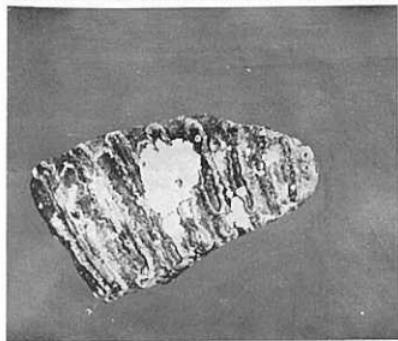
相知中学3年青木隆弘君は佐里採石場、北波多村行合野稗田を中心におウムガイの大型化石をはじめ、ウニ、カイサンゴ、サメなど百数十点を採集している。また唐津市神集島の高崎國久氏によって、玄界灘の鳥糞礁灯台沖の海底から採集されたナウマンゾウの歯の化石は、西九州地区では注目される資料である。有田中部小学校からの連絡では同町の柳門谷から大型動物化石の産出が知られ、また西有田中学の池田教諭のお話では、佐世保市外木原の採石場から、日本的に珍らしいトリの化石が発見されたとのことである。

この化石展を契機に日頃は捨てられ、忘れ去られる一片の化石から悠久につながる地質時代の生物を科学する気運がいくらかでも、醸成されるならば望外のよろこびである。末尾になるが、この企画に終始ご協力いただいた、佐賀大學講師西田民雄氏に深く謝意を表したい。

(学芸課 手塚 静雄)



(カメの化石)



(ナウマン象臼歯)

資料紹介(2)

坂の下遺跡

—西松浦郡西有田町山本—

坂の下遺跡は、黒髪山に端を発した清流が、有田町、西有田町、伊万里市内を蛇行し、伊万里湾に流れ込む有田川の支流、淨源寺川の上流約2km、東を佐賀県、西を長崎に二分する国見山麓が平地にゆるやかなスロープをつくる標高約80mの舌状台地の先端、やや東寄りに階段状に開かれた水田に位置する。

この遺跡は黒曜石の原石を産する腰岳に近接し、生活の利器である石器の原料が勞せさせて入手でき、国見山麓には「山の幸」が生息し、丘陵では多量の「木の実」が採集でき、ひと走り台地を下れば「川の幸」、「海の幸」が手にはいるという、自然物採集経済下の原始時代において、生活の場として最適の地であったと思われ、有田川の両岸には多くの遺跡が点在することが知られている。

昭和41年4月、水田の耕地整理のため耕土の結果、表土から1.5mの深さの地点から石器や土器片が多数発見されたことにより、阿高系統の土器を伴なうところから繩文時代中期の遺跡として注目され、昭和41年6月予備調査を行なわれて、遺跡の重要性が新たに確認された。昭和42年県教育委員会によって西有田繩文遺跡発掘調査委員会が組織され、8月に益人岩洞穴遺跡、伊古石遺跡、11月の潮汛期に坂の下遺跡の調査を行なわれた。さらに昭和45年12月に坂の下遺跡の第二次調査を行なわれた。坂の下遺跡の第一次発掘調査の結果7個の貯蔵穴が確認され、その内2個は乾燥穴と思われる。さらに第二次発掘調査では12個の貯蔵穴が確認され、当遺跡は一大貯蔵穴群址であることが判明した。

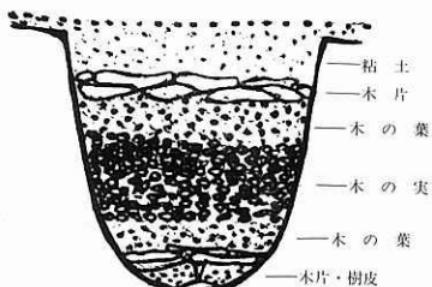
確認された貯蔵穴は大小さまざまな不整円形で、大形のものは直径310cmから小形のものは直径100cm前後のもの

まであり、深さも90cm~120cmと一定の形態を示さない。これらの貯蔵穴のほとんどに木の実が保存されており、保存方法は貯蔵穴の壁面・底を青色粘土で固め水分の侵透を防いでいる。まず一番底に木片を置き木の葉を一面に厚く敷き詰め、その上に木の実を一杯詰めこんでいる。さらに木の実の上に木の葉を相当多量にのせ最後に木片を置いて保存、貯蔵したものと思われる。

ここで貯蔵されている木の実は、アラガシ・チャンチンモドキ(チャンチン)・シイ・茶等で、その中でもアラガシとチャンチンが絶対量を占め、特にチャンチンはこの種のみ、ひとつずつ貯蔵穴に貯蔵されている。しかしアラガシ・チャンチンとともにこの近郊には現在植生しない。これらの木の実は当時食料としたもの、おそらく木の実を蒸したりすりつぶして乾燥し粉に加工してパン状の食料として常食したものと思われ、繩文時代前期末の岐阜県峰一合道路や繩文時代中期の長野県曾利遺跡で岩化したパン状の食物が発見されているところから、当遺跡においても同様のことか推察でき、繩文時代中期における食生活の一断面がうかがわれる。

貯蔵されている木の実は相当量出土しており、その内の約100粒のアラガシの実を水洗し、水にひたしてガラスピンに保管していたところ、第一次発掘調査から約7カ月後の昭和43年7月上旬に発芽していることに気づき、諸機関の努力で育苗に成功し、現在本筋で成長を続け、青々とした葉16枚をつけ、高さ30cmまでに成長した。しかし一方では「他からの混入では」という問題提起がなされたが、発掘調査当時の模様、地層、現在の植物分布等から考えてみると調査の当事者として「他からの混入」という問題は考えられない。さらに貯蔵穴内のアラガシの炭素14の測定の結果、今から3849±78という絶対年代の数値が出された。

この坂の下遺跡の二回における調査の結果全国的に例の少ない今から約4000年前の貯蔵穴群址であることのみでなく、当時の食生活の一断面や、貯蔵穴群から推定される集落・自然物採集経済下における集団の定着化等の大きな問題を提起したものといえる。(学芸課 森 醉一朗)



(坂の下遺跡貯蔵穴式型図)



(アラガシの幼木)

資料紹介③

大願寺廃寺跡遺瓦

瓦は、崇峻天皇の元年（588）に、百濟から正式にわが国に伝えたといわれている。飛鳥時代においては、瓦は寺院のみに使用され、百濟系と高句麗系の瓦が用いられている。白鳳時代になると、寺の他に宮殿にも瓦が使用され、唐系の瓦の影響もあらわれてくる。奈良時代に入ると瓦の需要は躍進的に増大し、寺や宮殿の他に、官衙・城柵・貴族の邸宅の一部などにも使用されるとともに、仏教の地方への伝播に伴なう地方寺院の建立は、瓦の使用を地方へも普及させていった。そのため、瓦に地方色が次第に加わっていったのが、奈良時代である。

飛鳥時代の瓦は、百濟系の単弁蓮華文鏡瓦が使用されているが、弁上に1個の弁子をつけた重弁蓮華文鏡瓦とこの鏡瓦に伴なう重弧文字瓦も現われている。白鳳時代に入ると、複弁蓮華文鏡瓦が現われ、字瓦には重弧文の他に唐草

いる。また、鏡瓦の単弁蓮華文の弁上には、1個の弁子がつけられていて重弁蓮華文となっている。

この大願寺廃寺跡の単弁蓮華文の鏡瓦は、基山町基跡城跡・上村寺塔の塚廃寺跡・小城町晴氣廃寺跡などから出土しており、重弧文の字瓦は、基跡城跡と晴氣廃寺跡とから1片づつ発見されているといわれている。

大願寺廃寺跡出土の単弁蓮華文鏡瓦や重弧文字瓦はいわゆる百濟系の瓦であって、県内に所在している奈良朝寺院跡と推定されている廃寺跡出土の古瓦には、この百濟



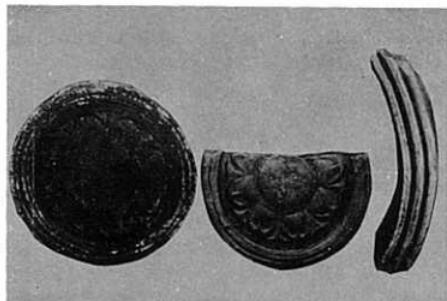
(大願寺廃寺跡)

系の単弁瓦と複弁瓦の二系統が存在している。同一寺院跡からこの二種類の古瓦を出土することは、やはり創建後における寺院の増改築や福修工事か施された実事を物語っているものであろう。

系統的には、単弁蓮華文の百濟系のものが、複弁蓮華文に先行することはいうまでもないことであり、創建年代が明確である肥前国分僧寺や国分尼寺からは、この種の百濟系文様瓦が発見されていない点も注目される点である。

大願寺廃寺跡の遺瓦を中心とした創建年代については幾つかの説があるて一定していない。しかし、奈良時代の天平年間に創建された肥前国分寺よりもその創建がさかのばることは、ほとんど疑う余地なく、県内に残存する最古の寺院跡の一つとして、その価値は高く評価されるものである。

(学芸課長 木下 之治)



(遺 瓦)

文が用いられるようになった。

大願寺廃寺跡は、佐賀郡大和町大願寺部落にあって、五社明神の境内に柱座造り出しの礎石が散在している。この廃寺の建立年や廃絶の時期など明らかでなく、また、寺の規模や様式なども一切不明である。五社明神の東方の水田中に巨大な二孔礎石が残存しており、礎石や遺瓦の残存状態からみて、この寺域は五社明神社を中心として二町四方におよぶ規模のものではなかったかと推定されている。

この大願寺廃寺跡からは、複弁蓮華文鏡瓦も出土してはいるが、最も注目されるのは、単弁蓮華文鏡瓦と重弧文字瓦とかが発見されていることである。単弁蓮華文鏡瓦は、その外縁に重弧文がめぐらっていて、重弧文字瓦と対をなして



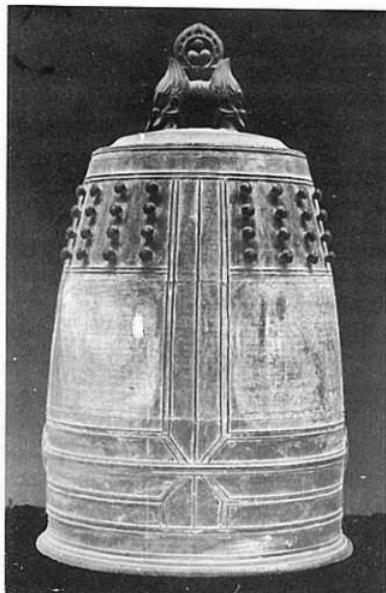
(二孔礎石)

資料紹介④

肥 前 鐘

ここに紹介する肥前鐘は、東松浦郡相知町大字黒岩の医王寺に伝えられていたものである。この鐘は本来、彼杵庄父賀志村宇都宮に在り、それが唐津市相賀法福寺に移り、そして現在の医王寺に納められたのであるが、それがいつの時代であるかは不明である。

肥前鐘は、鎌倉時代の後期から南北朝時代にかけて、肥前国上松浦山下庄で铸造された銅鐘をいうのであって、形態は梵鐘と半鐘の中間形で比較的に小形であり、また、形式は和鐘ではあるが、龍頭・駒の爪・乳の形式などに獨得の特徴がみられる。また、記名年号に北朝の年号を用いていることも特筆すべきであってわが国の工芸史、政治史の上からも注目されるものである。現在、全国に6個の肥前鐘が存在しており、佐賀県内には医王寺のものが唯一のものである。



医 王 寺 の 肥 前 鐘

医王寺の肥前鐘は、永和2年（1376）に铸造されたもので総高83.2厘、鐘身高62厘、口径49.5厘である。

龍頭は笠形から出た方柱をくわえた形をとり、その上に火焔にめぐらされた3個の宝珠が蓮台にのり、火焔の最上部にはハート形の透しがある。

乳座は4区に分かれ、1区に4箇の乳が4列に配されている。これらの乳は基部で細まり、乳頭に小突起をもつ特色ある形態をなしている。

また、駒の爪形が2段になっていることもその特色の一つである。

池の間に文様ではなく、4区のそれぞれの池の間に次の線刻銘がある。

第1区 諸行無常 是生滅法 生滅々已 寂滅為樂 大
旦那 駿河守藤原 朝臣通景敬造 院主 義英

第2区 西海路肥前州彼杵庄内 父賀志村 宇都宮

第3区 貴賤男女 大小助縁 不可勝数
永和二年内八月吉日

第4区 作者 有智田祐久

鐘座は、蓮子九顆八葉蓮弁に小八葉弁を加え中房と大蓮弁の間に茎をあらわしている。

肥前鐘が铸造された上松浦山下庄の所在については諸説があり、また鐘の作者である有智田祐久についても今後究明せねばならない問題である。

(学芸課 木下 巧)

★参考文献 佐賀県文化財報告書第3集（昭和29年）松尾

楨作 医王寺の肥前鐘

佐賀県の文化財



第 3 池 間 の 線 刻 銘

資料紹介⑤

近代洋画壇に活躍した人々 (その1)

百武兼行のこと—

百武兼行の生涯について詳しく語る伝記は残されていない。いくつかの記録の断片が、彼のある程度の輪郭線を描いてくれるだけである。

彼は天保14年(1843)佐賀藩士百武兼貞の嗣子として生まれ通称を安太郎といった。

若い時から経済学を得意とし、鍋島直大に従って三度にわたる渡欧の後、農務省商工局次長として晩年を終えている。

彼の画歴がいつ頃まで潮るかは定かでないが、いわゆる洋画に手を染めたのは明治7年秋の再渡欧以後のこととされている。それより先、明治4年1月から同7年7月まで直大に従い欧米に遊んでおり、おそらくこの時直接西洋絵画に接したと考えられるが、視察旅行としての巡回が目的であり、多分にあわただしい旅程であったうから、油絵を専門的に研究する余裕はなかったと思われる。明治7年秋の再度欧の後、同11年7月一時帰国しているが、同13年直大がイタリア公使となると、三たび兼行も外務書記官として同行し、同15年帰朝するまでイタリアに滞在している。彼の没年が同17年12月であるので、7年から15年までの8年間を、彼の絵画活動のほぼ全容を示してくれる時期であると考えてよいだろう。

今、この8年間の彼の画歴を一連の様式上の発展過程として捉えるのは非常に困難である。というのは、彼が意識的にせよ無意識的にせよ用いた技法、様式は実に多彩であり、むしろ一種の様式上のカオスの状態をさえ示している場合があるからである。このことは、彼の油絵研究の限界を示すよりも、彼が当時の洋画家と同じくまだ西欧の美術史の潮流を明確に把握していかなかったことを示すものとして理解できよう。

そのためここでは、彼の風景画と人物画をとりあげ、そこに現れたいくつかの特徴を追いかながら、彼が西欧の美術から摂取した跡を見ていきたい。

百武の初期の風景画においては、彼の画才は明らかに遠近法と明暗法のために捧げられている。さらに英國風の写実性に加えて水彩風の柔かな筆触が画面全体に落着いた雰囲気を与えている。一方イタリア渡航を境として、彼の風景は、逆光線のもたらす強い明暗法の効果と劇的な構図をとり入れている。

そこにはパロック的な画面構成とロマン主義の香りの融合を見出すことができる。しかも背景の建物は、しばしばバーソン流のクラシシズムを思わせる。

ひとつのかなバックスの中でこの驚くべき様式の混淆は、



「老婦人像」 1882年 油彩 53×56cm

人物画において一層顕著である。彼の描く人物が挿絵の「老婦人像」にも見えるように概して彫塑的な印象を与えるのは、彼の師事した画家たち——チャードソン、ボナルマッカリ——によるものと考えられる。アカデミーの洗礼を受けた彼にしてみれば、線的な描線による自然の模倣に技量を傾注したのは当然といえよう。しかし、例えば当館蔵の「羊皮製の樂器を持った男」には、はっきりとマティエールそのものの効果をねらった、いわば印象派の先駆要素を含んだ筆触を見ることができるし、石橋美術館の「裸婦」はかなり豊満なパロック風の構図を、また彼が好んで描く衣服の刺しゅうは彼のロココ趣味を想わせる。

しかし、この様式上の混淆のため彼をアマチュアとすることはできない。

アカデミスクが相変わらず画壇の主流ではあっても、すでに一方ではロマン主義から写実主義、さらには印象派への流れは、いつしか大きな美術主潮として訴えてくる時代である。それらさまざまな様式の誘いの前で、彼は自らの新しい様式を創りあげるためにのみ、実に自由に、時として大胆なまでにそれらに接したのであり、そこからある自然な調和を画面に生みだしたのである。それは緻密な意味で彼を芸術家と呼ぶにふさわしい才覚といえるだろう。

確かに彼の画業は何らかの時代的な制約を受けている。そしてそのことが近代日本洋画の歩みを解く鍵のひとつでもあるといえる。

しかし、彼の作品は当時の画壇との直接的な交渉がなかっただけに彼らのひたすら追求した写実主義を越えて今なお明治初期洋画の異彩を保ち続けている。饒舌ではないが彼の厳しい芸術意欲を、そこから感じないわけにはいかない。 (学芸課 三輪 英夫)



(ロビーのレリーフと舟形石棺)

昭和45年

4月1日 佐賀県教育庁博物館開設準備事務局発足

6月29日 新館へ移転

- 7月1日 佐賀県立博物館発足
 10月14日 開館記念式典
 10月15～11月3日 開館記念「桃山美術名作展」
 10月24日 記念講演会
 11月16日～11月29日 第20回県展
 12月1日～12月6日 高校美術展

昭和46年

- 12月10～2月15日 常設展
 1月15日～2月15日 幕末維新佐賀先哲資料展
 2月20日～3月25日 化石展
 3月6日 記念講演会

昭和46年度の事業計画（予定）

企画展			常設展	
展覧会名	会期	会場	会期	会場
シルクロード展 主催 佐賀新聞社	4月25日～5月8日	大、中展示室	3月30日 9月5日	1、2、3号展示室 大展示室（4月22日から5月10日までを除く）
野鳥展	5月20日～30日	中展示室		
坂ノ下繩文遺跡展	7月20日～8月31日	中展示室		
日本古美術展 共催 東京国立博物館	9月11日～10月3日	1、2、3号 展示室	12月4日～12月26日 47年 1月5日～1月16日	1、2、3号大展示室 1、2、3号大展示室
理科作品展 共催 佐賀県理科教育振興会	9月20日～30日	大、中展示室		
富岡鉄斎名作展 共催 日本経済新聞社	10月7日～22日	1、2、3号 展示室	2月4日～3月31日	1、2、3号大展示室
第21回県展 共催 佐賀県教育委員会	10月30日～11月7日	全館		
明治、大正、昭和三代美術 名作展 共催 文化庁	11月15日～29日	1、2、3号 展示室		
日本美術院展 共催 佐賀県教育委員会	47年 1月21日～30日	1、2、3号 展示室		

博物館報	第1号
発行年月日	昭和46年3月31日
編集	古賀秀男
発行	佐賀県立博物館
住所	佐賀市城内一丁目15-23